

公民館の図書室は 学びの入口・みんなの本棚

図書室月報

2025 年(令和7年)
10月5日 第749号

PDF版

国立市中 1-15-1
TEL.042-572-5141
FAX.042-573-0480
国立市公民館

〈2025年7月6日開催 図書室のつどい 参加者の感想〉

栗田 隆子 著

『「働けない」を
とことん考えてみた。』ともか
川口 智佳

「じゃあ、働いたことないんですか？」と問われたときのざらついた感覚が、今も消えない。大学を卒業してすぐ未婚で出産し、娘が3歳のときに大学院に進学したわたしは、正規雇用での就労経験はない。しかし、高校卒業後から大学入学までの1年間は非正規労働者として週5日8時間働き、アルバイトは16歳のときからしていた。それでも「働いたことがない」と判断されたのは、いわゆる「正社員」が労働者の標準とされている象徴なのだろう。だが、そもそも「働く」とは何か。本当に「働いていない人」など存在するのだろうか。栗田隆子さんの講座と書籍からは、そうした社会の前提を根底から問い直す言葉が投げかけられていた。

「差別は人の「気持ち」や「憎悪」の話だけではなく、制度やシステムに起因する」と栗田さんは話していた。年金や手当を受給している人に対して「ズルい」と感じる風潮や、支援を受けるのは「本当に困っている」人でなければならぬという空気。こうした価値観は制度的に再生産され、個人に内面化されていく。けれど、そもそも「本当に困っている」とは誰が、どのように決めるのだろうか。その判断を「正常」とされる側が担う構造自体が、賃労働をしていない病者やようがいしや、あるいは専業主婦に対する疑念や不信の表れでもある。こうした構造そのものが、人々の心を疲弊させているのではないのか。

講座の前後で著書『「働けない」をとことん考えてみた。』も読み進めた。印象的だったのは「普通になりたいたい」という気持ちがどこからやってくるのか？ と突き詰めると、究極、「怠けている」だの「ズルい」だの「性格に問題がある」といった罵倒や非難をされない状態」を求めているのではないかという指摘だった。社会の期待に応えられない人々は、評価されないだけでなく、ときに「恐れ」や「軽蔑」の対象にすらなりうる。「不幸があまりに大きすぎると、人間は同情すらしてもらえない。嫌悪され、おそろしげられ、軽蔑される」というシモーヌ・ド・ビュイユの言葉からは、この社会における「許容の限界」が静かに浮かび上がってくる。

わたしは現在、臨床心理士を目指して大学院に通い、自らも心理支援を受けながら生活している。講座終了後、栗田さんと短く言葉を交わす機会があった。「臨床心理士を目指しながら自らも心理支援を受けていることに矛盾を感じる」と説明したわたしに対して、栗田さんは「矛盾というより入り子構造のようですね」と返してくださった。その表現には、単線的で一貫した自己でなくてもよいのだという柔らかさがあった。自分にまつわる語りをどう編んでいくか。無理に単純化しようとせず、複雑なままでもどまる強さをもってよいのだと、背中を押されたようだった。

講座と書籍を通じて、「働けない／働かない／働きたくない」という状況は、その人自身の資質や努力の問題ではなく、むしろ社会の制度や価値観のなかで作られ、押しつけられているものだという視点が得られた。それは決して「楽になる」ための免罪符ではない。ただ、「楽になつてはいけない」という思い込みをほどく手がかりにはなるはずだ。

(平凡社)

〈2025 年 8 月 3 日開催 図書室のつどい 参加者の感想〉

「本とつはできるのに、 できないと自分で決めつけていた 私の背中を押してくれた、 済東鉄腸さんへ」

佐藤 初美



8 月 3 日の図書室のつどいの会場入り口で、済東さんは、私
たちを笑顔で迎えてくださいましたね。私はその姿に接し、こ
のような細やかな心遣いができるってステキな人だなと感じ入
りました。そして、どんなお話をしてくださるのだろうと、つ
どいが始まるのが待たれました。

私が参加申し込みしたのは、公民館の入り口に掲示された
『千葉からほとんど出ない引きこもりの俺が、一度も海外に
行ったことがないままルーマニア語の小説家になった話』とい
う長いタイトルに、引き寄せられたからです。

引きこもりだった人がルーマニア語で小説を書いて、公民館
で話することになったなんて、何故？ お話を聴きたいと強
く思ったのです。

つどいは始まり、右手にマイクを、左手は盛んに動かしなが
ら表情豊かに語る済東さん。その内容の独自性は波動のように
伝わってきて、私は引き込まれ、時にうなづき、時に驚きなが
ら興奮をおさえることができないのです。

引きこもりの時にルーマニア映画と出会い、それがルーマ
ニア語習得の契機になったそうですが、済東さんにとっては人
生の転機にもなりましたね。引きこもりをしていたことによ
りルーマニア語を学ぶ時間が確保でき、さらには同語による
小説を執筆し、その小説がルーマニアの文芸誌に掲載されると

いう快挙を成し遂げたことに、大きな拍手をお贈りします。私
が一番心を動かされたのは、済東さんが「自身と向き合い、
思索し続け、ついには「自分は唯一無二の存在なのだ」と気
づいた」ということでした。生きる上での核となるものを
つかみましたね。すばらしいことです！

済東さんのお話を拝聴し、私は自分に引きつけて考えて
みたのです。このような場では最後に質疑応答の時間が
もたれるのが常ですが、私はこれまで数知れず講演を聴い
てきたのに、生来の話し下手と羞恥心から一度も挙手する
勇氣を持てずにいたのです。しかし、脱引きこもりという
困難に立ち向かった済東さんに倣い、私も蛮勇をふるつ
て一言だけでしたが感想を述べることができました。あり
がとうございます。ドキドキでした。

この度の図書室のつどいの後、ご著書二冊を拝読いたし
ました『千葉ルー』（左記書名略称）と『クソツタレ革命』。
クローン病という難病に罹患され闘病中とのことだす
が、お身体を大切になさってくださいませ。

息苦しいような同質社会ですが、世の中の風潮に流され
ることなく、自分を信じて歩み続けて参りましょう。

・済東鉄腸著『千葉からほとんど出ない引きこもりの俺が、一度も海
外に行ったことがないままルーマニア語の小説家になった話』（左右社）

くにたちブッククラブ

—自分と「似ているもの」/「似ていないもの」—

村田沙耶香『コンビニ人間』（文春文庫）

講 師 榎本 正樹（文芸評論家・現代日本文学）
と き 10月9日（木）夜7時半～9時半

第 155 回芥川賞受賞作で、海外からの
評価も高い作品。皆様はどうお読みに
なるでしょうか。



織田作之助『夫婦善哉』（決定版）（文春文庫）

講 師 尾崎 名津子（立教大学・日本近現代文学）
と き 10月16日（木）夜7時半～9時半

幾度も映像化され、織田作之助の代表作とも
いえる作品。皆様で「読み」を共有してみましよう。
※9月11日（木）実施予定が、上記の日時に変更となりました。



ところ 10月9日は公民館地下ホール、10月16日は公民館 3階講座室

定 員 いずれも30名 ※参加者多数の場合、市内在住・在学・在勤の方を優先することがあります。

申込先 公民館 ☎042(572)5141 またはホームページより申込

*ブッククラブ HP▶



新着図書から

＜歴史＞

台湾の歴史大全 春山明哲(藤原書店) 222
安重根 上垣外憲一(ミネルヴァ書房) 289

＜社会科学＞

ボリビアを知るための65章 大島正裕編著(明石書店) 302
ウガンダを知るための62章 吉田昌夫編著(明石書店) 302
大学生がレイシズムに向き合って考えてみた 貴堂嘉之監修(明石書店) 316

平等について、いま話したいこと

マイケル・サンデル(早川書房) 316

戦争・植民地支配とアーカイブズ 1・2 安藤正人(東京大学出版会) 317

ウクライナわたしのことも思いだして

ジョージ・バトラー(小学館) 319

国連 山本栄二(筑摩書房) 319

ジェンダーの視点で学ぶ憲法入門 川口かしみ(大月書店) 323

再審弁護人のベレー帽日記 鴨志田祐美(創出版) 327

冤罪 西愛礼(インターナショナル新書) 327

よりみち部落問題 角岡伸彦(ちくまブリマール新書) 361

部落フェミニズム 熊本理抄編著(エトセトラブックス) 361

日本とフランスのカワイイ文化論 高馬京子(明石書店) 361

「ちいさな社会」を愉しく生きる 牧野篤(さくら舎) 361

だったら、あなたもフェミニストじゃない? アルテイシア(講談社) 367

小児科医「ふらいと先生」が教えるみんなを守る子ども性被害 今西洋介(集英社インターナショナル) 367

歴史をひらいた女たち 江刺昭子(インパクト出版会) 367

教育にひそむジェンダー 中野円佳(筑摩書房) 367

フェミニスト・ファイブ

レタ・ホンダ・フィンチャー(左右社) 367

現場発災害時に子どもを支える 伊藤駿(岩波書店) 369
誰にも頼れない不登校の子の親のための本 野々はなこ(あさ出版) 371

ぼくたちはChatGPTをどう使うか 東大カルベ・ディエム(三笠書房) 375

分離はやっぱり差別だよ。 大谷恭子(現代書館) 378

ルボ軍事優先社会 吉田敏浩(岩波書店) 392

日本軍兵士続 吉田裕(中公新書) 392

＜自然科学＞

しっぽ学 東島沙弥佳(光文社新書) 481

災害支援における多職種連携 小井土雄一(編集(医学書院) 498

＜工業＞

神戸 村上しほり(ちくま新書) 518

北国の暮らし Kuro(KADOKAWA) 590

＜芸術＞ 台湾クラフトへの旅 平野久美子(小学館) 750

＜言語＞ 「嘘をつく」とはどういうことか 池田喬(筑摩書房) 801

翻訳をジェンダーする 古川弘子(筑摩書房) 801

ことばの教育の力 佐藤慎司(明石書店) 807

＜文学＞ 荷風たちの東京大空襲 西川清史(講談社) 910

楽園の楽園 伊坂幸太郎(中央公論新社) 911

ものごころ 小山田浩子(文藝春秋) 911

熊はどこにいるの 木村紅美(河出書房新社) 911

産む気もないのに生理かよ! 月岡ツキ(飛鳥新社) 911

はざまのわたし 深沢潮(集英社インターナショナル) 911

月とアマリリス 町田そのこ(小学館) 911

図書室のこと

学びを支える

民主主義のかたち

お話 荒井文昭(東京都立大学名誉教授、多摩住民自治研究所理事長、自治体問題研究所理事)

今月は「教育」をテーマにした本を取り上げます。今回お招きする荒井文昭さんは、「だれが教育を決めるのか」をテーマに実践的・理論的な研究をされてきました。

荒井さんによれば、教育とは本来、学ば側が本当に学びたいと思えるものに出会い、自由に話しあい、試行錯誤を重ねて、他者と学びあう営みであり、その実現には教育職員の専門性に基づく自律的な教育活動が欠かせません。しかし、現在の教育現場は「民意」の名のもとに統制の強化が進められてきたと指摘します。今回は、荒井さんの近著の研究成果をもとに、教育をめぐる諸課題と自律的な教育活動を支える民主主義のあり方を考えます。

＜荒井さんの本＞『教育の自律性と教育政治』『教育管理職人事と教育政治』ともに大月書店など多数。

とき 11月22日(土)朝10時〜12時

ところ 公民館 3階講座室

定員 35名(申込先着順)

申込先 10月9日(木)朝9時〜

電話または申込フォームより

公民館 ☎042(572)5141



〈私の本棚から 第1回〉

太宰治 著 『人間失格』

川越 彩心 あやみ



私が「人間失格」を初めて読んだのは小学四年生の頃である。この物語の主人公、大庭葉蔵は、家柄や地頭の良さ、人を笑わせる才能、そしてなんでもそつなくこなせる要領の良さを持ち合わせた好青年である。しかし彼は、生来の人間不信により自ら破滅の道を行く……というのがこの物語のあらすじだ。

破滅、と一口に言ってみたものの、それが酒に溺れることなのか、薬物に溺れることなのか、はたまた人間失格の烙印を押されることなのか、私にはあまり分からなかった。葉蔵は物語の最後辺りに、脳病院、今で言う精神病棟だろうが、そこに入れられる。周囲にいる患者は、みな社会から「狂人」として見られている。そこで彼は、自分が社会から「人間失格」の烙印を押されたと悟る。そして彼はその病棟で、自分以外の患者を「狂人」と呼び、自分のことは「廃人」と呼ぶ。自分以外は、「狂った人」。そして自分は、「廃れた人」。「廃れる」とは、「今まで盛んだったものが滅びる」という意味を持つ言葉だ。主人公は、曲がりなりにも友人をつくり、恋人をつくり、妻をつくっている。自分の生来の人間不信を覆い隠し、笑顔で振る舞う「道化」で、どうしても信じることが出来ない人間とほんの少し繋がりがりながら、社会の一人として振る舞っていた。しかしそれすらも滅んでしまった。「滅びた人」。周囲の患者は狂いながらも人であるが、自分自身は人として滅んでいるから、もはや人間ではない、と考えたのだろう。しかし社会が彼のことを廃人と呼んだ事はない。だからおそらく、社会は彼のことを「狂人」の一人としてみているのだろう。つまり「人間失格」の烙印を押したのは、他ならぬ大庭葉蔵その人なのかもしれない。自分で、自分の中にいた「確かに人間であった自分」「人間らしかった自分」を、何度も渴望しながら殺してしまう。皮肉な、彼の人間としての最期が非常に生々しく描かれている。

小学四年生当時、この本を読んで、人間の「愚かさ」「弱さ」という新たな一面を目の当たりにし、ひどく衝撃を受けたのを覚えている。読んでから少しの間、精神が不安定になった。精神が不安定と言っても、大庭葉蔵ほどでは無いだろうが。

それでも私はこの小説が好きだった。「愚かさ」とは人間の一部であり、それはすなわち私の一部ということである。当時の私は大庭葉蔵を微かに見下しながら、同時にひどく共感していたのである。周囲の人々が何を考えているのか分からない恐怖、人にも何もかも見透かされているのではないかとという恐怖、それは小学生の時に私が常に体験していた感情だった。自分は昔から空気も読めず、そのくせ人の感情を察する能力は人並みにあったから、場を白けさせて、それに気付いてしまつて、周囲の人の乾いた笑いの中で挙動不審になることが多かった。そのせいで余裕がなくなり、でも余裕がないことを知られたくなくてひた隠し、結果的に周囲を傷つけてしまつて、という状況をひたすら繰り返していた。きっと、余裕がないことも、自分のことが大嫌いなことも、それでも優しくしてくれる人がいる所為で孤立したくない気持ちが芽生えて、まがりなりにも周囲と関わりを持つとうとすること、全部周囲の人が見透かしているのだろう、その上で周囲は何を考えるのだろうか、同情、呆れ、軽蔑……分からない。だからそういう恐怖を抱くたびに何度も読んだ。きっと今ではもう15回は読んでいるだろう。この話の中の堀木と葉蔵の関係に少し似た、見下しながらの付き合い、をこの本とはずっと続けている。

係から

今月から川越さんの「私の本棚から」が始まります。これから半年にわたって様々な本を感想とともに紹介していきます。次回以降もどうぞお楽しみに。



(K A D O K A W A)

〈文化・芸術講座〉

どっこい生きてる

～来たらだいたい何とかなる街、大阪・釜ヶ崎の出会いと表現の場から～

釜ヶ崎で、喫茶店、ゲストハウス、まちを大学に見立てた釜ヶ崎芸術大学などの活動を通して、様々な背景を持つまちの人と共に、出会いと表現の場づくりを行ってきた上田さんにお話を伺います。参加者で言葉を出し合って創作する「合作俳句」のワークショップも実施予定。

と き 10月25日(土) 昼2時～5時

お 話 上田假奈代 (詩人、NPO 法人「こえとことばとこころの部屋」(ココルーム) 代表)

講座参考図書

* 釜ヶ崎で表現の場をつくる喫茶店、ココルーム …………… 上田假奈代 (フィルムアート社)

／ 詳細は公民館だより10月号をご覧ください。／